

命ある限り

〃時、春秋しゆんじゆうに移ろいて／三年みつせは過ぎぬ、いまは、はや／別れ離る日の近づきて／胸の憂いの多さわなれば／美わしかりし夢の世に／ああ、いま一度ひとたび還らばや…〃

旧制高校時代の友四人は夜ふけた名古屋の一室で、いつのまにか低く、しかし、悲しくこの「別離のうた」を口ずさんでいた。明朝早く発たつ上路君の心情を知っていたからでもあるが、もうこの四人が相集うこともないと思うているからでもある。

上路君は銀行勤務を退き、やがて奥さんに先だたれ、いま一羽の文鳥と暮らしている。その世話で時間が厳しく制限されている。私―「二日や三日ぐらい預かってくれるひとはいるんだらう?」「隣がが預かってくれると言うが、どうしてもその気になれないんだ…ぼくが外から帰ってくるだろう、玄関へ飛んで来て出迎え、うれしそうなそぶりは大変なものだ…」

六十一歳で亡くなった奥さんはガンだった。「女房がね、死ぬ時、ぼくに言うんだ。あなたの命のある限り、ピー子を守ってね…」

ピー子とはこの小鳥の名。二人には子供はなかった。たかが文鳥一羽と思つていたが、「あなたの命のある限り」——いまわの際の夫人の言葉の、何と、痛切極まりないことだろう。私たちは声を発しなかった。

彼は続ける。「女房が朝、台所で菜を刻んでいたが、明けていた窓の敷居に小鳥がひよいと飛んで来て、チュンと一声。女房もチュンと答えた。こんどはチュンチュンと二回鳴くんだ。女房もチュンチュンと二回答えた。するとピー子がすつと部屋に入つて来たんだ。…玄関から出る時もあるが、すぐ戻ってくる。外が怖いんだね…」

彼の昨年の句——「亡き妻の眼鏡も拭けり今朝の秋」透明な秋の朝。命の澄明ちようめいさが漂うている。

(一九九〇年十一月十五日)